

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：33301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成 22 年度～平成 24 年度

課題番号：22530934

研究課題名（和文）

近代日本の学生文化の形成と伝播 ～身体・ハビトウス・ネットワークからの分析～

研究課題名（英文）

The formation of student culture in modern Japan: from a viewpoint of body management, habitus, and network.

研究代表者

井上 好人 (INOUE YOSHITO)

金沢星稜大学・人間科学部・教授

研究者番号：30319032

研究成果の概要（和文）：「書生」と呼ばれていた学徒たちはいかにして「学生」になったのか。明治初年から昭和戦前期に至るまで、エリートの卵としての「学生」のアイデンティティは、いくつかの節目ごとに変化をとげてきているが、その過渡期に焦点をあて、学歴エリートの代表たる旧制高等学校の学生を中心に、旧制中学・高等女学校の生徒も含め（彼らを総称して「学生」と表記する）、鍛錬、衛生、娯楽、趣味、恋愛、野心、運動、エリート意識、教養といった身体管理の技法や道徳観をめぐる様々な言説が「学生」たちにとってどのような“世界と自己とを意味づけるコード”として受容あるいは反発されてきたのかを、地方メディア（新聞、雑誌の報道や連載小説など）と「学生」側の校友会誌や日誌類、名簿類を相互に対照させながら分析した。

研究成果の概要（英文）：How the elite which was called "Syosei" become "Students." ? Up to the Showa period from Meiji first year, the identity of the students as elite has changed little by little. We examined the discourse with a focus there, surrounding the high school students with Newspapers, magazines, and novel. In addition, I have also used roster and magazines issued by the students. And I analyzed the problem of elitism they had, for example, love, entertainment, training, and student culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 22 年度	300,000	90,000	390,000
平成 23 年度	300,000	90,000	390,000
平成 24 年度	300,000	90,000	390,000
総計	900,000	270,000	1170,000

研究分野：教育社会学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：教育社会学

1. 研究開始当初の背景

近代的な教育思想の普及や学歴社会化とそれに伴う階層分化の過程に関心を抱く教育史や歴史社会学の近年の課題は、人々の身体

観や空間認識および時間意識、そしてハビトゥスの変容の過程を、社会階層の形成問題と関連づけて分析しようとするにある。いかにいえば、明治中期以降、ジャーナリズム

や言論界で様々に語られてきた若者の身体を標的としたまなざしと「青年」の誕生に至る制度化の過程を、新たに形成・分化されつつあった社会階層間の文化やハビトゥスの葛藤として捉え、相互の教育戦略のせめぎ合いの過程として分析しようとする試みである。しかし、このためには方法論として従来のような学校史あるいは雑誌、新聞記事といったそれぞれ単一の資料分析に留まることなく、文学や経営史・経済学など分野の異なる資料も収集し、多角的な分析を試みる学際的なアプローチが必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、近代日本の学歴エリートたちにとって、鍛錬主義、衛生思想、武士道の称揚、純潔、良妻賢母思想、礼儀作法、集団主義、教養・情操教育といった身体管理の技法や道徳観をめぐる様々な言説がどのような“世界と自己とを意味づけるコード”として受容あるいは反発されてきたのかを、地方メディアと「学生」側の校友会誌や日誌類とを相互に対照させながら分析することを目的としている。そして、産業社会化への趨勢とこれに伴う階層構造の変動を背景として、彼らの社会的地位の変化や新たな社会階層への転身の問題として、どのような主観的な意味世界が構成されあるいは変容していったのかについて、彼らの身体所作や感情・感性の変化と社会的ネットワーク形成のレベルから明らかにするものである。

3. 研究の方法

戦前期に旧制高等学校が置かれていた地方都市が主要な研究フィールドである。その中心的存在である旧制高校をはじめ旧制中学、高等女学校の「学校史」や「校友会誌」、「同窓会雑誌」の記事はもちろん、各種名簿類を効果的に収集しデータベース化する。同時に、同地の地方ジャーナリズムに着目した資料収集・分析を行う。

「学生」は新聞や雑誌を媒介として、地方政界、知識人、商工業層、地主層、宗教人とともに広義の「メディア共同体」を形成しており、これゆえ資料的にも、彼らの制度への他律的な「困り込み」を跡づけるというよりも、むしろ、自らのアイデンティティの危機と葛藤を克服しようとする主体的な過程を捉える視角が得られるのである。

資料類の分析枠組みは、次のようなものである。①「身体」を標的とした様々な教育言説が発せられ構成されていく過程や背景を、中央→地方の言説の伝播・浸透の過程と単純に捉えるのではなく、その地域固有の問題（経済闘争、政治闘争、階層的なハビトゥスや教育戦略の相違にもとづくせめぎ合い）としてどのように意識され問題化されてきた

のか。②第一次世界大戦以後の中産階級の急激な増加という事態が、学歴エリートの中産階級的な価値観への同調とどのような関係があったのか。③学生の社会的地位の変化や新たな社会階層への転身の問題として彼らの主観的な意味がどのように変容・構成されていき、彼らの社会的ネットワーク形成にいかなる影響を及ぼしたのか。

4. 研究成果

(1) 坪内逍遙の小説『当世書生氣質』の分析を通して、彼らが学歴エリートとしての「同輩集団(peer group)」の絆を取り結んでいこうとする姿を析出した。

同書は、彼が「学士」の称号を伏して「春廼舎隴」のペンネームで、1885(明治18)年から1886(同19)年にかけて全17巻の和装本で出版した小説である。江戸情緒の色濃く残る明治十五年頃の東京の「世態風俗」を背景に、さる「私塾」の書生の風俗を描いたとされる。モデルは、坪内が在学中の東京大学生である。出版当初、遊蕩する惰弱な書生を描くとは鄙猥卑俗で文学士の著作とも思われぬ、との批判が寄せられたにも関わらず、学生やインテリ層を中心に熱狂的に読まれベストセラーになった。

なぜ、読者たちはこの作品の虜になったのだろうか。理由の一つは、彼らの間に江戸期の戯作文芸が流行していたことである。『八犬伝』の一節など暗誦できないと「友人間に何となく肩身が狭く感ぜられた」(市島春城「明治文学初期の追憶」)という。だが、これだけならヒットの理由としては不足だろう。おそらく、インテリ向けの「ローマンス」としてのストーリーと江戸戯作+開化風俗+西洋文学という作品構成が、読み手のリアリティに共鳴し、彼らの潜在的な嗜好や願望を掘り起こしたからではないだろうか。小論は、そういう読者も含め、登場人物たちの教養や感性を当時の社会的文脈から解釈しながら、同時代の学生たちの“憧れ”や“不安”も含めた現実感に迫った。

井上(2002)においては、学生の「身体」という観点から、「花暦講」的な風流遊びから近代西洋的なアスレチック・スポーツへの移行の過渡期として同時代を捉え、彼らの身体の鍛錬に関する態度、情欲に対する身の処し方をめぐる葛藤の構図を析出した。小論では、彼らの「生態」から世界観や現実感の取り結び方についてみようとするのである。

『当世書生氣質』の「ローマンス」の世界は、「文学士」+「春廼舎隴」の取り合わせの妙の成果として、あらゆる意味で境界性の産物でもあった。

作品は“花のお江戸”の四季の魅力を満載し、江戸通人の風流と色恋を教示するガイドブック的趣向を帯びている。この趣向は、上

京を志す地方の若者たちに対し、“憧れ”という、立身出世とは異なる学生生活の魅力を提示したことだろう。『東京遊学案内』ならぬ“江戸遊学案内”としての機能である。竹内(1978, 53頁)は、若者を地方から東京へ駆り立てた地理的移動の原動力として、高い文化、消費生活への憧れである「都鄙雅俗」(柳田国男)の感覚を指摘しているが、同作品にも、上京青年たちがこの“憧れ”の感覚を共有し、遊楽空間を遍歴しながら絆を結んでいく様子が描かれている。坪内のようなマージナルな出自と経歴をもった書き手であってこそ描けたのかもしれない。

さて、作品には、「極楽トンボ」で風流と遊楽の空間を彷徨い、諧謔の世界を楽しむ学生たちの姿が、いささか戯画的に描かれているとはいえ、あるいは現実生活で取り結んでいた重層的な関係が半ば意図的に伏せられているとはいえ、学歴エリートとしての「同輩集団(peer group)」の絆を取り結んでいこうとするオルタナティブ(alternative)な学生像が示されていた。

その学生像は、交友関係を通して己の世界の殻から脱し、可能性を広げていこうとする精神をもっている反面、彼我との軋轢やジレンマに悩む弱い人間でもある。作品の背景が、文明開化の慌ただしい世間を叙述しながらも、見通しのきかない路地裏や田舎道のセピア色の風景を前景として際立たせていたのは、このようなオルタナティブな学生像の行方を彼らが模索し葛藤する心象風景を映し出していたからであった。現代の我々がこの作品に親近感を抱いてしまうのは、彼らの抱える漠然とした不安や軋轢に共感し、噂に流されやすかったり、同輩からの承認に敏感だったりする姿に、自分を重ねることができからであるかもしれない。作品は、坪内逍遙や高田早苗を中心とする同輩集団の“開き直り”の表明であったようにも読めるのである。

(2) 明治初年の萌芽的な学生像とは異なる、「故郷」の記憶を絆やアイデンティティを“再発見”し、これを抛り所にしようとする“同郷会型”の学生像の登場を扱った。

上京学生のために旧藩ごとの寄宿舎の開設が流行となるのは、明治二十年代に入ってからである。このタイプの寄宿舎で、最も早い時期のものは、旧加賀藩地域(加賀・越中・能登)出身学生の寄宿舎である「久徴館」である。同館は、明治15年、土岐儻、北條時敬、竹村勇次郎、河村善益、櫻井一久、清水一郎ら県からの留学生8名が集い、「人材養成ノ目的ヲ以テ社ヲ起サンコトヲ議シ」総則十一条を定めて興された結社がその端緒である。当初は牛込区佐内町長泰寺内にあったが、翌16年に神田区東紅梅町に移転。明治18(1885年)年、「育英社(後、加越能育

英社)」※(明治12年に創設された日本で最古の育英事業団体)に吸収合併され、翌19年に、本郷区駒込西片町に本館を新築・移転している。新築後の館長は櫻井錠二である。

この時期に、このようなタイプの宿舎(“同郷会型”寄宿舎と呼ぶことにする)が勃興してきたことをどう理解すればよいのだろうか。同施設に集った学生たちは、貢進生世代の気質の延長線上に位置づけられるのだろうか。彼ら郷友会の初期メンバーとなっていく久徴館の在館者の特徴を明らかにすることによって、「流動エリート」の地元-中央の関係について考察を深めていった。その結果、以下の点が明らかになった。

まず、同郷集団に所属することのメリットとして考えられる点は、まず、慣れない東京暮らしの不安を解消し、課外での「学生生活」を楽しみたいとする願望を比較的容易く実現できたことに加え、同郷の成功した先人たちとのコネクションを制度的に取り結ぶ機会であったことがあげられる。すなわち、同施設は、立身出世を水路付けしたいとする彼らの野心に応えるための、ひとつの解決策として機能するはずであった。

一方、坪内逍遙が『当世書生気質』で描いた学生たちは、すでに明治十年代中葉には、出身地や旧藩の郎党意識の違いを乗り越え、共通の趣味や考え方にもとづいて絆を取り結ぶようになっていた。彼らは、例えば“磊落派”vs“謹直派”などといった対立関係を抱えながら、引き延ばされた学生生活に楽しみや意味を模索するようになっていたのである。

とすれば、“同郷会型”は、坪内逍遙が『当世書生気質』の中で描いた学生の連帯の姿とはいささか異なる方向であったと言わざるを得ない。坪内の住居が、明治20年になって旧松山藩「常盤会」の寄宿舎として建てかえられ、そこへ正岡子規が入舎するのは皮肉な出来事ではあった。だが、久徴館の意外な不人気と明治29年に至る閉館をみれば、さして遠くない未来を見ていた坪内の慧眼ぶりに驚かざるを得ない。

実際、久徴館設立の主導メンバーでもある北条時敬、早川千吉郎、永山近彰、織田小覚、土岐儻、中橋徳五郎、河村善益が「十四会」(おそらく明治14年結成から名付けられた)を結んだときも、決して同郷人だけの会ではなかったのである。同会が、平山銓太郎、岡田良平(静岡県、文部大臣、京都帝大総長)、一木喜徳郎(静岡県、岡田の弟、文部大臣、旧制武蔵高校校長)、平沼騏一郎(津山藩、内閣総理大臣)、岡田次郎作、鈴木馬左也(高鍋藩、第三代住友総理事)の他府県出身と共に結成され、彼らの間に生涯にわたり親交と友愛が深められたことに留意すべきであろう。

(3) 明治三十年代後半以降、旧制高等学校を席卷した校風論および校風改革運動を検討した。この運動の高まりは、日清戦争後明治三十年代にかけて教員を中心とした人々の学生へのまなざしの変化、あるいは学生自身のアイデンティティの変容をめぐる模索と苦闘の過程を映し出しているだろう。

その一例として、第四高等学校の校風を一言で表徴する「超然主義」を取り上げた。高山樗牛の「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」を引用したとされるこの宣言は、時習寮をめぐる印象的なエピソードと共に語り継がれ、一高の「籠城主義」に対する四高の伝統的な校風として内外にアピールするのに貢献してきた。この「伝統」は、四高にあっては明治三十年代末から四十年代初頭にかけて、同時期に旧制高校を席卷した校風論および校風改革運動を背景に、生み出されたものである。一体、誰によって何のために創られたのだろうか。学生のリーダーはどのような意志をもち、周りの教師たちはどのような思惑をもって見守っていたのだろうか。四高の「伝統」がどのように「創られた」のかについて、当時の四高の置かれていた社会的状況に照らしながら、学生間のヘゲモニー争いの内実に迫り、事実関係を紐解いていった。その結果、次のことが明らかになった。

四高の校風改革運動は、明治三十年代後半以降に、学校を人格形成のための重要な場だと考えるようになった学生たちが、理想の学校生活の在り方を模索していく奮闘の過程であった。そこでは、自身のアイデンティティを確立していくために、仲間たちとの関係をどう取り結んでいくべきか、ということが主要な関心事になった。共同生活を営む寮や塾が、象徴的な場として論争の槍玉にあげられる所以である。

同時代はまた、教員をはじめ人々の学生へのまなざしの変化していこうとしていた。教師の側にも、学生との関係をどう取り結んでいくべきか、についての葛藤があり、従来とは異なるオルタナティブな「教師－生徒関係」の模索が続いていた(注8)。三竹にみられた、学生の背後にあって、様々な示唆を投げかけ“黒子”として糸を操るスタイルは、新しく見出された教師像のひとつであった。

「超然趣意書」の提出と「超然主義」の標榜は、こうした彼らの奮闘のとりあえずの答えであった。では、この「趣意書」が、いつ、誰によって提出されたのか、についてみておこう。「38名」のうち、卒業まで寮生活をしたのは、わずか9名であった。「超然趣意書」は、1908(明治41)年の秋(同世代の卒業時)に、寮代表者から校長(吉村寅太郎)に提出された。河合良成が仕掛けた寮への問いかけは、皮肉にも彼が寮風運動から「脱退」し卒

業したあと、ちょうど火災から2年半たってようやくその答えが出されたのである。

時習寮が「超然寮」のニックネームを冠し、「超然主義」とは何か、が自問されるようになるのは、これ以後の話である。「38名」が「三十八士、口敢て人を動かすに足らず、態度敢て華々しきものあらむ。而もその誠意は耳口ある志士を奮起せしめ遂に校風発揚論の先駆をなす」(「時習寮大茶話會」『北辰會雑誌』第54号)と英雄視され、寮風会が結成され「超然主義ヲ標榜シ、純良ナル寮風ヲ発揚シ、是ヲシテ校風タラシムル」と謳われるのは、1909(明治42)年になってからである。神話はこの頃に“創られた”のである。

(4) 学都・金沢の明治期にも、旧制高校生などを主人公にした恋物語があった。

菊池幽芳が大阪毎日新聞に連載した小説「寒潮」(連載期間:1908(明治41)年1月1日～4月21日)である。これは四高の一学生と「北陸女塾」(注1)の女学生を中心に、男女3組の恋愛模様を描いた物語で、兼六園での逢引場面なども交え、学歴エリートたちの文化と彼らを取り巻く世相を描いた家庭小説である。彼らのハイカラで洒落た趣味の影に潜む甘い誘惑、というプロットが読者の好奇心を喚起する仕掛けになっていた。ところが、同小説は、当時、校風改革運動最中の第四高等学校生徒(以下、四高生と略称)たちによって次第に問題化され、同年4月21日で連載中止に追い込まれた。「寒潮事件」である。

「寒潮」は、なぜ四高生によって問題とされたのだろうか。ラベリング論の考え方を「誰が誰を何のために非難したのか?」—にもとづいて、同小説の連載を問題視し“事件化”させていった人々の思惑を浮き立たせ、当時の四高生を取り巻く葛藤の図式を析出した。具体的には、金沢大学資料館が保管している『学籍簿』と『学年評定簿』を利用し、四高において校風を問題視し“事件化”させていったグループと制裁された学生(小説のモデルにされ鉄拳制裁を浴びた一学生)のプロフィール分析を行うことによって、糾弾者/非糾弾者の特徴を浮き彫りにした。

その結果、誰が学内闘争の主導権を握ったのかという視点から、校風改革運動にリーダーとして活躍した学生たちは、まず出身地については、たしかに石川県を中心とする北陸地方出身者が多いが、必ずしも偏りがあるとはいえず、むしろ共通点として彼らの学業成績が総じてきわめて優秀であるという点が明らかになった。弁論大会や校友会誌で論敵であった者たちはあくまで論争上の対立であって、互いに一目置くエリート同士であったのである。

また、事件が四高側に有利な条件で収束し、学生の団結が一層強まるに至るのは、“黒子”

役としての教師たちによる“影からの支援”があったことも明らかになった。「寒潮事件」は、学生の「自治」による「修養」体制にむけていっそうの駆動力を強化させるため、学生リーダーたちと教師の利害が一致した形で共同的に仕組まれた事件であったのである。

(5) 日本における西洋音楽の受容と普及は、旧制高校から大学へと進学していったエリート学生に負うところが大きいといわれる。西洋音楽に親しみ自ら活動に参加することは彼らにとってどのような意味をもったのか。旧制高校、特に第四高等学校（金沢）の音楽部に焦点を絞り、学生の自主的な活動を支えた人々との繋がりに焦点をあて、彼らの音楽活動の社会的な意味について検討した。

すると、明治期の四高音楽部は、単なる教員と学生の自主的な活動域を超えて、金沢のキリスト教関係者との交流を含んだ、もっと広い交際圏の中で位置づけられていたことが推察された。日本における洋楽受容の窓口は、従来から指摘されているように、①軍楽隊、②式部寮雅楽伶人、③文部省音楽取調掛→東京音楽学校、④キリスト教諸派、の4系統あった。旧制高校をはじめ高等教育機関に在籍する学生たちの洋楽愛好とその形式の広がり、学生が、野球やボートレース、テニスなどのスポーツ文化の普及・形成において主体的に関与していったのとは、その経緯が随分異なる。それぞれの学生が、上記いずれかの窓口と密接な関わり合いを保つ中で、ようやく学校内の同好の士が集まり、組織化されていったのである。

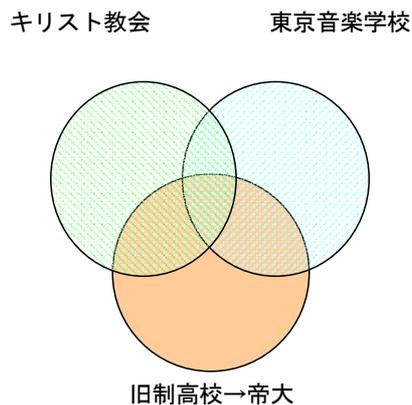


図 明治期の洋楽愛好者の位置づけ（理念型）

(6) 大正から昭和初期にかけての娯楽と身体表象を粟崎遊園（石川県）の事例を取り上げて分析してみた。同遊園は、1925（大正14）年、「北陸の材木王」といわれた平澤嘉太郎が石川県河北郡内灘町向粟崎の砂丘地に私財を投じて作った大遊園地である。こうした「郊外」のレジャーランドという新しい社会

空間が、北陸地方で初めて受容され一世を風靡した背景に、人々の娯楽文化や身体表象のどのような芽生えや変化があったのかについて検討を加えた。

当時の「衛生」・「健康」の言説流布との関係を探るべく、オピニオン・リーダーとしての北國新聞社のスタンスを中心に考察し、あわせて高等女学校の遠足記録から、学校の遊園利用の実態にも言及してみた。

粟崎遊園は、北陸地方で初めてテクノロジーとエンターテインメントの要素が結びついた大衆娯楽施設であった。それは、伝統的な「遊楽」の空間ではなく、子どもから若者、婦人まで含んだ幅広い層の人々がアクセス可能な余暇空間として構想され、実際にその思惑どおり大きな賑わいをみせたのであった。この施設は、平澤嘉太郎という事業者が小林一三の宝塚をモデルとして事業化されたものであったとしても、地元新聞社による時事記事や保健・薬品関係の広告をはじめ、自社の率先した社員旅行企画の記事などの無意図的な宣伝効果も含めて、相乗的に人々の関心を集めるところとなった。

また、この余暇空間が社会的に人々の受け入れるところとなった理由として、競技スポーツの大衆化と軌を一にしている点があげられよう。すなわち、競技スポーツは、競技場やグラウンドのような場所があることによって、ひとつの風景として受容されてきたのと同様に、粟崎遊園のようなレジャー施設も学校や工場の空間からは排除されてしまうような雑然とした身体を、その衛生的で規格化された環境によって取り込み、各施設に配分し管理することで無害化する空間であったことが大きいと考えられるのである。新聞メディアのような道徳性を伴った言説に耐え、広く人々の支持を得ることが出来た理由はこういうところにもあるように思われる。

また同遊園は、工場で働く職工たちの慰安旅行として大口の利用があったり、小学校の修学旅行で「コドモの国」の利用があった記録があったりしたが、一方で、この新しい管理された余暇空間は学生や女学生の出入りする空間とはしては不向きでもあった。それが一体どのような論理と心理によるものであったのか、大衆の新しい余暇空間の編成と身体管理の関係の検討は、ようやく緒についたばかりである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

① 井上 好人、「四高・「超然主義」の神話誕生～河合良成の校風改革運動と時習寮の「38名」～」『金沢大学資料館紀要』、査読有、第

7号、2012年、1-13。

②井上好人、「四高「寒潮事件」に秘められた四高生と女学生との純愛～なぜ“墮落学生”のレッテルが貼られたのか～」『金沢大学資料館紀要』第8号、2013年、35-47。

③井上好人、「四高における音楽部の創設～石倉小三郎に集う洋楽愛好者たち～」『人間科学研究』、金沢星稜大学人間科学会、査読無、第4巻第2号、2011年、7-12。

④井上好人、「大正・昭和初期の粟崎遊園にみる娯楽と身体表象～『北國新聞』記事を中心とした分析～」、『人間科学研究』、金沢星稜大学人間科学会、第6巻第2号、2013年、5-12。

〔学会発表〕(計2件)

①井上好人、「明治前期の「久徴館」と旧加賀藩出身学生～『久徴館同窓会雑誌』の分析から～」、教育史学会第54回大会(於：早稲田大学、2010年)。

②井上好人、「大正・昭和初期の粟崎遊園にみる娯楽と身体表象～『北國新聞』記事を中心とした分析～」、日本文化政策学会第5回年次研究大会(於：早稲田大学)、2011年。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 好人 (INOUE YOSHITO)

金沢星稜大学・人間科学部・教授

研究者番号：30319032

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし